



EL SALVADOR

学校名：川越市立今成小学校

氏名：今井 奈央子

[担当教科：小学校全教科]

- 実践教科等：道徳
- 時間数：4時間
- 対象児童：小学校4年生
- 対象人数：67人

1 単元名

日本、外国、自分を見つめよう

2 単元の目標（ESD の能力・態度）

本単元は、道徳の時間として扱い、大きく3つの主題から構成されている。

第一次に「日本のよいところを探そう」として、世界の中の日本に目を向け、日本の美しさや文化、技術の高さに触れ、日本を愛する心情を育てる(つながりを尊重する態度)。

第二次に「外国のよいところを探そう」として、外国の文化について知り、外国の人々や文化を大切に、日本人としての自覚をもって世界の人々との親善に努める心情を育てる(多面的・総合的に考える力)。

第三次に「自分のよいところを探そう」として、自分や友だちの特長に気付き、よい所を伸ばそうとする心情を育てる(つながりを尊重する態度)。

3 ESD(持続可能な社会づくり)の視点

多様性	相互性	有限性	公平性	連携性	責任性
-----	-----	-----	-----	-----	-----

エルサルバドルの人々や文化について知り、世界には様々な国があり、多くの人々がそれぞれの考え方や知恵を持って暮らしていることに気付かせたい。また、一村一品運動の考え方を通して、自分や友だちの得意なこと、よいところを見つめ、互いに認め合うことができる態度を育てる。【多様性】

日本とエルサルバドルの共通点・相違点を見つける活動を取り入れる。また、両国の文化的な関わりについて紹介する。さらに、エルサルバドルで活躍する日本人ボランティアの方々の活動を紹介し、両国が互いに連携・協力していることを理解させたい。【連携性】

4 単元の指導について

(1)教材観

人は、生まれ育つ国から様々な影響を受けて、国に対する様々な思いを抱き、成長する。自国の伝統や文化、先人の努力に対する理解などを通して、たくさんのプラスとなる影響を受ければ、国の伝統や文化を継承し、貢献しようという生き方へと発展していくと考える。児童の視野を広げるために、わが国だけでなく、外国の人々や文化にも関心をもつように、日本人としての自覚を喚起し、国や郷土の伝統や文化を愛する心を養いたい。(第一次)

一方、地球規模での相互交流が増し、国際理解教育の必要性が叫ばれている昨今、自国だけでなく外国の人々や文化に関心をもつことが重要になってきている。外国の自然や文化などを踏まえた総合的な理解と、相手の立場に立った共感的理解、互いの問題を解決していこうとする受容的な関心や態度が必要である。(第二次)

さらに、エルサルバドルのサンビセンテ市で行っていた一村一品運動の「ないものを嘆くのではなく、あるものを生かす」という考え方を通して、自分自身の特徴についても振り返らせ、児童の自己肯定感を高めたい。自分の特徴を知ることは、他と比べて特に自分の目立つ点に気付くことであり、長所も短所も含まれる。しかし短所や欠点を探して「自分は〇〇ができない、〇〇が苦手だ」と悲観するのではなく、長所や好きなこと、得意なことを探して「自分は〇〇ができる、〇〇が好きだ」という考え方に切り替え、互いに認め合うことができる態度を育む。そのためには、児童が多様な個性や生き方に触れる中で、自分の特徴に気付くようにしたり、友だちとの交流の中で認め合う場をつくったりして、意欲を引き出すことが求められる。自分が生まれ育った日本のよさを再確認し、外国の多様な文化や人々の暮らしを知り、それらの学習を踏まえた上で自己を振り返らせたい。(第三次)

(2)児童生徒観

本学級は、高学年に近づき、社会的認識力が身に付きつつあり、視野も拡大してきている児童が多い。様々なメディアを通して、外国への関心を徐々に持つようになり、外国の情報を自分たちなりに得ている。しかし、社会科学習の内容はまだ地域社会中心であり、日本の伝統や文化に関心を持ち、そのよさを大切にしようという意識は高くない。これからの国際社会に生きていく児童に向けて、世界の中の日本を意識させ、国や郷土を大切に思う心情を育てていきたい。

外国への関心を持つ一方で、自分と異なる習慣や考え方をを持った相手に拒絶的な反応や、攻撃的な態度を示すこともある。違いに対して、どうしてそうするのだろう、調べてみよう、聞いてみようという、相手の立場を考えた対応が求められる。行ってみたい国を調べ、エルサルバドルの文化や人々について知ることをきっかけとし、諸外国の異文化を理解し、尊重しようとする態度を育みたい。このような態度が育まれることで、自分自身の文化や生活も見直すことができると思う。

また、自分と友だちを比較して考えたり、友だちの目を気にして自信をなくしたり、人と違うことに不安を感じたりしている児童も少なくない。友だちや周囲の人間から認められ、褒められることにより自分のよさに気づき、自信をもつことができるようになると思う。一人一人がすばらしい個性を持った存在であり、自分のよさや可能性を大切にしていこうとする心情を高めたい。

(3)指導観

第一次「日本のよいところを探そう」では、フォトランゲージを行い、日本の風景・伝統・文化・技術を想起させ、日本のよさ、すばらしさに共感させる。日本のどんなところを大切にしていきたいか、多様な意見を引き出すことにつなげる。

第二次「外国のよいところを探そう」では、前半で「行ってみたい国調べ」として、調べ学習とグループ学習での小発表会を行う。国名・国旗・衣食住や観光地など、自分が行ってみたい国の簡単な紹介を書くプリントを用意し、調べ学習を行う。その後、調べた国についてグループ内で小発表会を行う。さらに全体で共有するため、教室に掲示し、近くに世界地図も掲示する。自分が興味を持って調べた国だけでなく、友達の行ってみたい国を知ることで、様々な国に興味を持つきっかけとする。

後半では「エルサルバドルってどんな国？」として、主にスライドショーでエルサルバドルの街並みや人々の暮らしを紹介し、日本と比較させたり、文化的なつながりを確認させたりする。違いがあるからこそ、進歩や発展があり、理解し合って互いに向上していくこともできる。スライドショーを上映しながら、違いをよさとして受容できるような発問や言葉がけを意識する。教師自身のエルサルバドルでの体験や感想を交えながら授業を展開し、児童の異文化に対する驚きや好奇心を大切に、児童が「もっと知りたい、調べてみたい、行ってみたい」と主体的な活動につなげられるような授業展開を工夫する。教師の体験や感想を交えて語ることで、世界の多様性を身近に感じさせたい。これからの国際社会を地球規模で考えていく必要があることにも触れ、外国への興味関心を高めたい。

第三次「自分のよいところを探そう」では、得意なことやできること等の技能的な面だけでなく、性格的なよさまで広げて考えられるように助言したい。互いのよさを伝え合うグループ活動では、最初のうちは照れや緊張があり、なかなか伝え合うことができず、活動が進まないことが予想される。時間をたっぷり取って、児童の緊張をほぐしたい。

5 評価規準

観点	道徳的心情	道徳的判断力	道徳的实践意欲・態度
評価規準	・世界の中の日本に目を向け、日本の風景・伝統・文化・技術などに触れ、日本を愛する気持ちを高める。 ・外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。	・日本のよさ、すばらしさに気づき、大切にしていきたいという思いを持つ。 ・自分のよさ、友だちのよさに気付くことができる。	・外国の文化に関心を持ち、互いのよさを理解しようとする。 ・自分にできることを考え、実行しようとする。
評価方法	発言、挙手	発言、挙手、ワークシート	発言、挙手、ワークシート

6 単元の構成

※太枠の授業内容詳細を「7 授業事例の紹介」に記載

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	日本のよい所を探そう 「日本ってどんな国？」 4-(6)愛国心※	世界の中の日本に目を向け、日本の美しさや伝統文化、技術の高さに触れ、日本を愛する心情を育てる。	1. グループ学習でフォトランゲージを行う。写真を見て気付いたことを挙げさせていき、その中から「日本のよさ」につながるキーワードを教師が拾う。写真の内容は、春の富士山と水田・茶道・夏祭り・平等院鳳凰堂・ロボット等、日本の風景・伝統・文化・技術を想起させるもの使用する。 2. 日本のどんなところを大切にしていきたいか、日本のよさを振り返る。
2	外国のよい所を探そう 「行ってみたい国調べ」 4-(6)国際理解※	自分が行きたい国の文化に関心を持ち、それらの国について調べ、理解を深める。	1. ワークシートを使用して調べ学習を行う。ワークシートは、行きたい国の国名、国旗、衣食住や観光地などの自由記述部分を設ける。 2. 調べた国についての発表会を5, 6人のグループで行う。 3. 授業後、ワークシートを教室に掲示し、全体で共有する。世界地図も並べて掲示し、様々な国に興味を持つきっかけとする。
3	外国のよい所を探そう 「エルサルバドルってどんな国？」 4-(6)国際理解※	世界中にある国の一例としてエルサルバドルについて知り、エルサルバドルの人々や文化に親しもうとする態度を養う。	1. スライドショーで、エルサルバドルの風土、衣食住、文化、人々について紹介する。マングローブ林やカエルキャラバンの様子も紹介し、ボランティアの方々の活躍に触れる。 2. エルサルバドルの小学校や子どもたちの様子をスライドで紹介した後、エルサルバドルの小学生に宛てた手紙を書かせる。
4	自分のよい所を探そう 「自分を見つめよう」 1-(5)個性伸長※	互いに認め合う態度を育てると共に、自己肯定感を高める。	1. 「町には時計台、おいしい木の実、美しい自然、伝統的なお菓子屋さんがあります。これらを生かして、あなたならどのように工夫して町興しをしますか。」と問いかけ、意見を挙げさせる。 2. サンビセンテ市の一村一品運動で実際に行われている活動を、写真を交えて紹介する。 3. 「〇〇ができない」ではなく「〇〇ができる、〇〇が好きだ」という考え方で自分について振り返らせる。 4. ワークシートに友だちのよいところを書かせた後、グループ活動で互いのよさを伝え合い、自己肯定感を高める。

※「小学校学習指導要領」第3章道徳、第2内容〔第3学年及び第4学年〕

7 授業事例の紹介

小単元名【エルサルバドルってどんな国？】

(1) 指導案

(ア)実施日時 10月29日(水)第5限

(イ)実施会場 視聴覚室

(ウ)本時の目標 世界中にある国の一例としてエルサルバドルについて知り、エルサルバドルの人々や文化に親しもうとする態度を養う。

(エ)指導のポイント

- ・違いをよさとして受容できるような言葉がけを意識する。
- ・教師の体験を交えて語り、外国への興味関心を高める。
- ・エルサルバドルの小学生に宛てて手紙を書く活動を通して、日本のよさを再確認するとともに、世界の多様性を身近に感じさせる。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	(1)前時を振り返らせる。 (2)「行ってみたい国調べ」で人気だった国をいくつか紹介する。	・日本のいいところを挙げ、授業を振り返る。 ・「行ってみたい国調べ」で出た国を振り返る。	全体指導	・前時で挙げた日本のよさを想起させる。 ・「〇〇ってどんな国？」と問いかけ、国調べで挙げた国を児童に紹介させる。	外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。 ・発言
展開 37分	(3)スライドショーを使ってエルサルバドルを紹介する。 ・風土 ・マングローブ林と漁民 ・町並み ・高台から見える景色 ・住居 ・カエルキャラバン ・食べ物 ・人々 ・日本とのつながり ・小学生 ・小学生との交流会 (4)エルサルバドルの小学生に手紙を書かせる。 ・発表させる。	・スライドショーを見て、エルサルバドルについて知る。 ・エルサルバドルの風景を写した写真を見て、どんなものがあるか挙げる。 「緑が多い、山、平屋の家」 ・マングローブ林と漁民についての話を聞く。 ・日本との違いに気付く。 「有刺鉄線、鉄格子、トタン屋根、銃を持ったガードマン、壁のペイントがきれい」 ・見えるものを挙げる。 「平屋が多い、緑もある」 ・日本との違いに気付く。 「中庭、明かりとりの窓」 ・カエルキャラバンについて知る。 ・日本の避難訓練との違いに気付く。 ・日本の食べ物と比較する。 ・プブサ、フリホーレス、バナナ等、代表的な食べ物について知る。 ・国民性について知る。 ・両国の文化的なつながりについて知る。 ・国は違っても、自分たちと同じように頑張っている子どもたちの様子を知る。 ・一緒に日本の遊びやラジオ体操をした話を聞く。 ・エルサルバドルの小学生に手紙を書く。(「エルサルバドルはここがすてきだね」「日本はこんな国だよ」の2点を中心に。) ・何名かの児童の発表を聞く。	全体指導	・エルサルバドルの国旗を掲示する。 ・位置を確認する。 ・国土が、沖縄と四国を合わせたくらいの面積であることを紹介する。 ・写真の中で気付かせたいポイントに目がいくように発問する。 ・漁民の苦労と、そこでのボランティアの方の活躍を紹介する。 ・異文化に興味を持ち、多様性を受け入れられるような声がけを意識する。 ・風土に適した造りであることを確認する。 ・日本から伝わった防災教育であることを確認する。 ・ボランティアの方の活躍を紹介する。 ・実際に食べた感想を交えて説明する。 ・「中米の日本」と呼ばれていること、勤勉であたたかな国民性、教師が実際に関わった人々を紹介し、身近に感じられるようにする。 ・日本のキャラクター、日本車、藍染、寿司など身近に感じられるものを例に紹介する。 ・藍染体験で染めたストールを見せる。 ・校舎内や校庭、授業風景、運動しているところ、休み時間の様子など、児童が自分たちと比較できるような写真を選ぶ。 ・エルサルバドルの玩具(実物)を紹介する。 ・エルサルバドルの小学生が日本に親しみを抱いていることを紹介し、親近感を持たせる。 ・焦点を絞り、取り組みやすくする。 ・互いの意見を全体で共有させる。	外国の文化や人々に親しもうとする気持ちを高める。 ・発言 ・発言 ・発言

外国の文化に関心を持ち、互いのよさを理解しようとする。
・ワークシート

・発言

終末 3分	(5)まとめる。 ・世界は195カ 国であり、日 本もエルサル バドルもその 内の一つで あることを確 認する。	・エルサルバドルに興味をもて たか、振り返る。 ・教師の話を聞く。		・様々な国に興味を持つ て調べたり、実際に行 ってみたいしてほしいこ とを伝え、終了とする。	・挙手
----------	---	---	--	---	-----

(2) 授業の振り返り

[良かった点]

- ・児童の反応がよく、熱心に聞いていた。どの児童も外国の文化に興味を持てた様子であった。
- ・視点をしばって発問したことで、教師が気付いてほしいポイントに児童がしっかり注目できていた。

[改善点]

- ・時間内に収まったが、やや詰め込みすぎだったように思う。内容の精選が必要である。
- 改善案→「エルサルバドルの紹介」「ボランティアの方々の活躍」を分けて授業を行う。

(3) 使用教材

- ・エルサルバドルについて説明する際に使用するスライドショー(PowerPoint で作成)
- ・スライドショーで使用する写真(風土、マングローブ林、町並み、高台から見える景色、住居、カエル
キャラバン、食べ物、人々、日本とのつながり、小学生、小学生との交流会の様子など)
- ・エルサルバドルの玩具(けん玉、ヨーヨー等)
- ・藍染体験で染めたストール
- ・エルサルバドルの小学生が使用している教科書(四年生の国語、算数)
- ・スライドショーを上映するための機材一式(プロジェクター、スクリーン等)
- ・ワークシート「サンタヘマ小学校のみなさんへ」(エルサルバドルの小学生に手紙を書こう)

(4) 参考資料等

該当なし

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

以下、児童の感想から一部抜粋して紹介する。

「日本ってどんな国？」

日本のよいところを大切にしたい。日本の技術はすごい。外国の人々に、日本のよさを伝えたい、知ってほしい。日本の四季は美しい。日本は食べ物が美味しいし、安全だし、住みやすいと思う。日本の自然を大切にしていきたい。

「行ってみたい国調べ」

自分の行ってみたい国について知ることができた。アメリカ、イタリア、フランス、ドイツが人気だということが分かった。発表会をして、色々な国について知ることができた。色々な国に行ってみたい。ほかの国についても、もっと調べてみたい。

「エルサルバドルってどんな国？」

エルサルバドルという国を初めて知った。遠くにある国なのに「中米の日本」と言われていると知り、驚いた。地震が多くて大変そうだった。日本のキャラクター、特にドラゴンボールが人気だなんてびっくりした。甘くないあんこが面白かった、美味しいのかな？ ププサがおいしそう、簡単そうだし自分も作ってみたい。エルサルバドルに行ってみたい。

「自分を見つめよう」

自分のいいところを見つけることができた。友だちから自分のよいところを褒められて、恥ずかしいけど嬉しかった。できることや好きなことを大事にしていきたい。苦手なことでも努力してクリアしたい。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

第一次の授業では、児童からは「日本は自然が豊かである」という意見が多く挙がった。また、「食事も美味しく、安全であり、科学技術も発展している」という発言があり、日本のよさを認識していることがうかがえる。「外国の人々に日本のよさを知ってほしい」という意見や、「2020年の東京オリンピックでは、世界中の国からいろんな人が日本に来ると思う。」などの発言もあり、世界の中の日本として捉えられている。これらの発言から、第一次の単元目標を達成できたと考える。

第二次後半のスライドショーを使った授業では、短く具体的な発問を心がけた。また、写真を変えるたびに、できるだけ多くの児童の意見を聞くようにした。こうすることで、より多くの児童の考えを全体で共有することができ、更に活発に意見が挙がった。管理職からは「児童が目まぐるしく変えてスライドショーを見ていた。発言も積極的に出ていて、強く関心を持っていたことが分かる」とのコメントをもらった。さらに、授業後の様子としては、教室に掲示した世界地図を見て、色々な国を探す姿が見られた。以上のことから、第二次の単元目標を達成できたと考える。

第三次の授業では、自己肯定感が低い発言をしていた児童が、友だちから「〇〇くんは面白いことを言っていていつも楽しませてくれる」と言われて嬉しそうにしていた。また、授業後の学級の様子では、何事に対しても「よいとこさがし」をしようとする児童の姿が多く見られるようになった。こうした児童の変容から、第三次の単元目標に迫ることができたと考える。

今後の課題は、今回の授業実践だけでなく、海外研修で得たものを他の授業でどのように生かしていくかという点である。避難訓練の際に、カエルキャラバンと防災教育のことについて触れたり、キャリア教育の一環として、現地で活躍するボランティアの方々の生き方を紹介したりできると考える。年間指導計画と照らし合わせ、多様な視点で各教科に取り入れていきたい。

また、他の教員も授業を実践できるような教材や指導案を残して、次年度以降に引き継ぐ必要がある。海外研修で得たものを、より多くの児童に還元していきたい。

10 教師海外研修に参加して

研修前、エルサルバドルに対して「治安が悪く物騒な国」という印象を持っていた。しかし、実際に訪れて一番強く感じたことは、人々の温かさであった。世界の多様性を受け入れる心を忘れ、頭でっかちになっていた自分の先入観を恥じ、目が覚める思いがした。「広い視野をもち、異文化を理解し尊重するとともに、異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図る」という国際理解教育の大切さを再確認した研修であった。

国際協力の現場で、ボランティアの方々が現地の人々と一丸となって課題を解決しようと取り組む姿に感銘を受けた。「2年で現地の人々の考えを変えようということではなく、まずは礎を築き、次の人間に繋げる」という西田シニアボランティアの言葉に、これがESDの考え方なのだと実感した。

また、エルサルバドルでは、行く先々で「日本の人々にとても感謝しています。帰ったら是非このことを伝えてください。」と言われた。日本から遠く離れたこの地で、これほどに日本に感謝の気持ちを抱いている人たちがいるということに驚いた。それはJICAの支援、ボランティアの方々の努力があつてのことである。各プロジェクトやボランティアの方々の仕事ぶりを視察させていただいたことで、身をもって感じることができた。

日本国大使や教育相副大臣から伺った話では、エルサルバドルは課題の多い国であり、改善の兆しが見えない問題もたくさんあるとのことであった。「他国の課題」ではなく、「国際社会が抱える課題のうちの一つ」としてとらえ、解決していこうとする受容的な関心や態度が必要であると改めて感じた。

この研修で自分が実際に経験してきたことを、授業だけでなく、様々な形で児童に伝えていきたい。そして、自分が伝えたことをきっかけに、一人でも多くの子が世界の多様な文化に興味関心を持ち、また、将来国際協力に携わる仕事に就いてくれれば、こんなに嬉しいことはない。